

"How to Construct a Useful Teaching Plan ?"

[Round-Table Talk]

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24873

座 談 会

役に立つ指導案をどのように作成するか

—— 教育実習の経験をふりかえって ——

日 時 昭和53年2月15日

場 所 金沢大学教育学部教育工学センター

司 会	日吉由己子	村上 仁美
出席者	間 和生	加納 弘子
	五十川安弘	中谷 晃一
	大野 朋子	堀内 陸美
	柏野 潔	山岸美津子
		ほか

指 導 山崎 豊

ま え が き

国立大学教育工学センター協議会では、これまで、研究課題として、「教授スキルの基礎的研究」について、研究を進めてきたが、今年度から、研究の領域をしばり、教育実習に役立つ教授スキルの開発へと焦点を向けることになった。金沢大学教育学部教育工学センター（北陸グループ）では、その研究の一環として、「教育実習のための授業設計に関する事前指導プログラムの開発」を担当することとなった。

センターでは、この研究を進めるにあたって、まず、若い学生諸君から、学習指導案をどのように書くか、について卒直な意見を聞くことが、研究に有効な手がかりを与えると考え、座談会を企画した。座談会は、昭和54年2月15日、金沢大学教育学部にて行われた。参加者は、教育学部4年の学生諸君であり、その前年に約6週間の教育実習を経験している。（山崎）

山崎 今日、みなさんに「役に立つ指導案

をどのように作ればよいか」について、いろいろ知恵をかりたいと思います。

その理由をまずお話しします。国立大学教育工学センター協議会という組織がありまして、その協議会から、私どものセンターに研究をやってほしいとの依頼がありました。そのテーマは、現在教育実習が問題になっていますが、それに関係したことです。

みなさん、ご承知と思いますけども、たとえば、中学校課程の学生が教育実習に行き、教員免許状をとりますけれど、なかなか就職できないわけですね。教育実習に仮に100人いったといたしますと、その中で本当に教員になるのは、まあ10人ぐらいなんです。実習に費用をかけても、その9割が無駄になっちゃうんですね。小学校の方はそれほどではありませんが、これまた協力校がなかなか得にくいので、1人の附属の先生に教生が7人も8人も、場合によっては10人以上もつくことがあり、それやこれやで、教育実習が問題となっております。

さあそうすると、教育実習に行く前に、教生が身につけておいてほしい事柄を前もって指導しておくことが大事なんですね。

それじゃどういうことを身につけたらいいか、ということを考えましょう。教員養成学部では、学生に一般的な教養を身につけると同時に、教師としての素質を養っていくことが重要です。

教師の素質というものは、大きく分けると二つに分けられまして、その一つはナレッジ・コンピテンシ（Knowledge Competency）といいます。それはどんなことかという、知識的な適性ということです。みなさんが、理科やその

他種々の教科を履習しますね。理科の専門では、化学を習ったり、物理学を習ったりいたしますけど、そういった科目は、ナレッジ・コンピテンシを養うためのものなのです。

それと平行して、一方では教壇に立ってうまくやっていく能力をパフォーマンス・コンピテンシ(Performance Competency)というのです。これは、実際にやってみるとか、実演するとかいう意味が含まれていますが、実践的な適性ということです。いくら知識がありましても、パフォーマンス・コンピテンシ、つまり、教壇の上で実践をする能力がないと、教師としては万全でないわけです。そこでなるべくなら、大学に在学の間に前者のナレッジ・コンピテンシと後者のパフォーマンス・コンピテンシの両方を育てていきたい。

とくに、後者のパフォーマンス・コンピテンシについては、教育実習が実践的な適性を育てる場として重要なわけです。現在の教育実習には期間も短いし、教官数も少ないなどの、問題点があります。それでは、なんとか教育実習の効果を高めるために、どうしたらよいか。その一方策として、たとえば指導案の書き方などを、教育実習に行く前に身につけることが望ましい。そうすると、附属の先生はたいへん助かるんですね。

そこで、教生にいくまえの人達が、指導案をうまく書かれるようになるには、どうしたらいいか。みなさんは、教育実習をやった経験もありますし、授業の設計とか評価についても勉強されたので、教生の人達がどのようにしたら、役に立つ指導案が書けるようになるだろうかということについて、ご意見を持っていると思います。そこで、この問題について話し合っていたきたい。

日吉さんと村上さんに、今日の司会をお願いしたところ、心よくひきうけてくださいました。では、バトンを日吉さんと村上さんに渡すことにします。

指導案を書くことの効用

日吉 先生から、今お話がありましたように、「どのようにすれば指導案を容易に作ることができるか」について、話し合いたいと思います。たいへんな問題で、むずかしいと思いますが、教育実習におけるみなさんの経験をもとに考えましょう。

昨日私たちが考えている時に問題になったのは、「指導案を容易につくる」というのは、どういう立ち場においてなのかかわからないことと、それから、その指導案は、どういう位置づけで作るのだろうか、その2つが問題になったので、そこらあたりのことをまず山崎先生に確かめてから、討論に入りたいと思うんです。

先生。まず指導案というのは、さきほどお話がありましたが、教育実習生を対象に考えていけばいいんですか。

山崎 教育実習に行ったとき、指導案を書いて、そして授業しますね。その時に必要な程度の指導案を思っているんです。場合によっては、研究のため1時間の指導案として、かなりくわしく書くような場合もありますが、今の場合、だいたい半紙1枚程度のくわしきの指導案を書くものと考えて下さい。その指導案が、教生である自分自身の授業に役立つには、どうするかということですね。

日吉 それでも、かなり問題がひろがるんじゃないか、と思いながら聞いていました。じゃ、話を具体的に進めていきましょう。教生期間中に、みなさんは毎回毎回自分の授業の場合には、略案か細案かは別として、いつも指導案は書いてると思うんです。指導案というのは、どうして書かなければいけないのか。私たち教生の立ち場において、指導案というのはどういう役割をもっていたのだろうか、そこらへんから思い出してみてほしいんです。どうですか。

大野 なんとなく指導案にとらわれすぎることもあります。指導案はあくまで、こういう授業をしたいという目あてを書くものであるけれ

ども、私たちは未熟なんでしょうか、授業する前に指導案を書いたら、そのとおりにすることにとらわれすぎるという危険性もおおいにあった。そのへんで指導案のあり方を考える必要があると思います。

要は授業が大事です。りっぱな指導案が書けても、授業がメチャメチャならだめだね。指導案がなくても、授業ができればそれでいいものかもしれない。でも、やっぱり何か書かないと、うまくいけないというのが本当のところですよ。教生が、ぶっつけ本番で、授業をすすめられる実力はないと思うし、そのへんはどうかしら。

村上 大野さんの場合に指導案を書いたことで、授業がやりやすかったということありませんか。たとえば自分の考えが整理できたとか。

大野 指導案なしで、すぐやって下さいと言われたって、できなかったと思います。

村上 だから、そういう具体的なことを、ちょっと言ってもらえますか。たとえば指導案を書いておくと、生徒がちょっと予期しないことを言っても、わりと軌道修正ができる。つまり、オロオロしなくてもすんだとか、そんな事があると思うんです。

大野 指導案を書くのは、教科研究につながっていくね。だから、指導案を書く、書かないは別として、各段階でどういうことを教えようとか、ひょっとしたらこういう質問がでたり、こういう意見がでたらどうしようか、など考えることは大切なことですね。指導案を書くことは、そこから考えると、やっぱりスムーズに授業するのに役に立つと思う。

日吉 という意見がでしたが、他の方はどうですか。

山岸 あしたはこんな事をテーマにしよう、と考える場合、何はともあれ、教材研究はするわけですね。そこで、これをこういうふうに進めていったら、わかるんじゃないかというのは、指導案を書かないにしろ、やっぱり考えると思うんです。だから、私も指導案を書いたらそれにとらわれやすいということもあるけれど、指

導案を書いたために、いわゆる教材研究が深まる、ということはあるんじゃないかなあと思うんです。特に、教生の段階では、書かなくてはいけないと思いますね。

日吉 ほかにどうですか。

加納 指導案というのは、教生の最初の段階では、何を教え経験させるかということが、はっきりしなくて、指導案の紙面には、その時間をどれだけもたすかということ、時間の配分表みたいな感じのものになってしまった。

最後の総合実習の時期になると、時間配分などはあまり考えなくて、その授業でなにをい wanna したいか、授業のポイントになることを三つほどあげて、その重要視したことを中心に計画しました。そして、さらに発展させ、子供たちから、どんな意見がでるだろうとかを予想しました。このように、自分なりの指導案のスタイルがはつきりしてきた。

指導案にはどんな項目が必要か

日吉 3人の人から、指導案が自分の立場において、どういう役割を果たしたか、ということについて話していただきましたが、私も同じようなことを考えていることがわかりました。やっぱり、指導案は私たちにとって、なくてはならないもので、書かなかったら、おそらく授業ができなかっただろう、という思いは誰にも共通してあると思うんです。

そして、指導案がどう位置づけられるかについては、今加納さんからもお話があったように、初めの頃と後の頃とでは、指導案の重みというか、位置づけが、かなり変わってきたんじゃないかと思われま

さて、その次に実際に自分が授業をしていて、「指導案がどんなふうに役立ってきたか」、の問題へ移りましょう。附属学校で使っていた指導案は、たとえば、学習の目標とか、指導上の留意点とか、配時とか備考とか、4つぐらいの項目に分かれていたと思うんです。それらの形式に合わせて、指導案を立てていくことによって、

どのように授業に役立ってきたか。そこらへんをちょっと考えていただきたいと思うんです。どうですか。

山崎 つまり、さきの話は指導案全部についてですけども、今度は項目ですね。内容とか流れとかそういったものを書くについて、それがどんなふうに役に立ったか。議論が一步細かくなってきたわけですね。

村上 最初は、指導案は配時表みたいだったと言われたけど、指導案の配時の欄は役に立ちましたか。たいていの場合、時間が計画よりオーバーしてしまって、なんだか無駄のような気もしないでもないんだけど……。

中谷 計画を立てる段階では、やはり必要だと思います。慣れないうちは、配時をしないと、全然わからなくなってしまう。配時をしてあっても、時間がオーバーして、結局は無駄になるかもしれないけれど、計画の目安として、ある程度ないと、次の授業もズルズル伸びるような気がする。やっぱり、ぼくは役に立ったと思っています。

大野 どこに重みを置くかが、それでわかりますね。最初の配時より、授業で時間をかけたところは、問題になる箇所だといえるわけですね。たとえば、5分のところを、15分もかかったらね。そしたら、そこではじめて、「やっぱり、子供は、こういう考え方をするのか。」など、反省の資料になるわけです。

何をポイントに書くべきか

日吉 それぞれの項目は、いちおう意味をもって存在しているわけですが、自分にとっての指導案というものは、どんな内容が書いてあれば、役に立つのだろうか。そこらへんのことを知りたいですね。実際問題として、私にはあの形式の指導案は、はっきり言って書きにくかった。自分たちがあとで修正したほうの指導案にも不備な点は、あったけども。

また指導案というものは、見せるための指導案という面もあるけれど、本来の目的は、自分

が授業するための指導案であって、人に見せるというのは二の次であると思うんですね。だから自分にとって、どういう指導案であれば、授業がしやすくなるんだろうとか、どういう指導案を書くことによって教材解釈が深まるんだろうとか、そういうことを考えながら、話を深めていったほうがいいんですけど……。

中谷 最初、指導案を書く時は、先生に「書け」と言われても、どうするか全然わからなかったですね、ぼくは。

それから研究授業をやる時に、先生に「こういう書き方じゃだめだ」と、いろいろ訂正されて、その時になってはじめて、「あっ、やっぱりこういうふうには書かなきゃならないのか」ということで、最初全然指導案の書き方を知らなかったため、大変苦労した。実際には、あれは先生に見せるための指導案であって、自分では別に案を作っていて、そっちの方で授業をしたこともあったよ。

柏野 指導案の書き方というのは、先生によってほんとうに違うね。(笑)

教生にいった時、たとえば、ぼくは6年で、担任の先生の他に、社会は別の先生、音楽は別の先生、というような具合で、数人の先生に指導してもらうことになってた。担任の先生に見せたように書いて、別の先生の許へもっていくと、「こんな書き方じゃ、指導案になっとらん」と社会の先生にこっぴどく言われた。がっかりし、担任の先生のとこへ再び持って行って、「こんなのだめだ」と言われたけど、「どうして」と聞くと、「ほんならほんでいい。」と言われた。(笑)

「自分で授業がうまくできれば、それでいいんだ。」と言われたり、また中学校へ回った時には、中学校の先生に「あら指導案で、こんなに書くのかね」と言われたので、「小学校で、こういうふうを書いてきたもんで…」と言ったら、「それなら、ほんでいいわ。」と言われた。(笑)

ぼくが思うには、指導案というのは、自分が授業やる時の授業の方針というのか、目安みたいなものになれば、それでいいんじゃないかと

思う。書き方とか、そういうことにあまり気を遣うことないんじゃないかな。どうでしょうか。

中谷 けども、教生の間は、やっぱり現場の先生に習うわけだね。そして、いちおうその先生のクラスをまかせられるわけだ。そしたら、担任の先生にもその指導案見てもらって、納得してもらうことは必要じゃないかな。

村上 自分のクラスなら、自由に書けるけどね。

中谷 そう。教員になってしまえば、それでいい。でも、指導案というのは研究授業をするときにだって配るよね。

村上 見る人の材料になるという意味で、そういう要素も確かにあるよね、指導案には。人に見せて見せびらかすものではないけど、「自分はこういう方針で、授業をしているんです。」ということを、口で説明すると同時に、時間がない場合は「それを見ればわかる」という、誰が見てもわかる、というようなものを書くことも、ある程度要因としてあると思うね。だから自分本位になって、自分しかわからない指導案じゃ困るような気はしますね。

五十川 あのね。なぜ指導案をしっかり書かなきゃいかんかという理由のひとつだと思うけど、急に病気で休んだとすると、そんな時は、授業をかわりの先生に頼むわけでしょう。その時に、指導案がきちんと書いてあれば、そして、その指導案が誰がみてもわかるように書いてあるなら、なんら差し支えがおこらない。そのような時のためにも指導案を書くのだともいえる。それだけじゃないけども、だいたいそういう時に役に立つような指導案を書かなければいけないと思うね。

日吉 確かに先生によって書き方はいろいろあるし、自分だけが授業をするのなら、どういう書き方をしようとかわらない、というところはあると思うんです。

ただそこで、何が絶対に必要なものか。これだけは、どういう書き方であれ、書かなければ指導案にはならないという、必要最低限の要素

みたいなのは、絶対でてくると思うんです。そういうのがあるんじゃないですか。思いあたるところはありませんか。

柏野 指導案を書くときはね、ポイントを押さえることが大切だと思う。その授業にポイントというのが1つの場合もあれば、3つぐらいある場合もある。その3つが、直列に並んだときとか、並列な場合とか、いろいろあるけれども、「パッ」「パッ」とそのポイントを押さえて、「最終的には子供にどういうことをマスターさせるか」、それをまず考える。指導ポイントと、その位置づけを書いてから、目的に到達するためには、どういうところから子供にあたっていけばいいか、つまり入りかたを決める。そしてそれに対応させて、学習行動を考える。あとは、適当に授業をおもしろく脚色するまたは、色付けみたいなものを、つけ加えればいいんじゃないかな。

清水先生に「入口と出口がない授業は、それは授業でない。」と言われて、ほくもそう思った。最終的には、それだけでもはっきりさせなければ、指導案にはならないと思う。

日吉 要するに、授業の入口・出口をはっきりさせる。それがどういう形でもいいけれど、はっきりあらわれていないと困る、ということですね。

村上 次に、指導案を立てる時に、「サラリと立った場合」と、「すごく時間がかかって、どうもだめだな」という時とがあったと思うんです。その、だめだった時に、どこがうまくいかなかったでだめだったか、という意見をちょっと言って下さい。

中谷 時間の配分というか、これはどれだけ時間がかかるのかというのが、最初は全然見当つかなかった。授業にね、教材を使うわけだけど、最初は、それをどれくらいの時間で子供がわかるか、というのがわからなかった。

山岸 だから、1時限のその時間内に教えなければならぬことをはっきりさせ、それをどういうふうにもっていくかというのがいちばん大事ですね。

柏野 時間配分は、いちおう決めてあっても、その授業の都合でなんとでもなる。早く終れば、次のことをちょっと長めにやればよい。慣れると、いくらでも間をもたしてやることもできる。けれども、授業の最終的なポイントへ持っていくその行き方が、指導案を書く段階で、いろいろと考えても、どうもうかばないことはやっぱりあった。

日吉 今話に出たのは、学習の流れがつかめないという問題だと思います。つまり、どういうことを教えるか、それにどう近づけていくか、どう進めていくか、ということが問題だ。皆さんの意見をまとめると、そうなりますね。どういうことを教えるか、というポイントについては、わりにすんなりとできましたか。

村上 目標をつかむというか、その時間にこれだけのことを教えようというのが、「すっ」とつかめましたか。

指導書の役割

柏野 いや。それは、ぼくらが自分で考えるのではなくて、指導書をぱっと見ていました。

日吉 やっぱし、指導書という題材についての見本があって、そこに作られたものがあるから、それを単に引用したにすぎない。そうですね。

村上 指導書に書いてある目標を、自分なりに理解して、その目標に近づくためにどうするか、ということを考えたんですね。

山岸 だからね、いろんな経験があれば、それらの進め方なり、教科書どうりのやり方にもまずいところのあるのを指摘できると思うんですね。でも、経験もなく、全然わかってないから、教科書に従うというやり方しかできないみたい。教科書を基に、いちおう考え直してみることは、必要だと思うけど。

柏野 指導書があるので、指導案がすんなりとできるんだ。教生中は、教科書の見直しをするのは、無理じゃないかな。指導書があるなら、それに従って、一応やってみて、今度自分が現

場に立った時に、自分なりのものを、何年かかかって作りあげていく、そういうもんじゃないかな。初めから指導書なんか見ないで、自己流で考えて、その結果、ムチャクチャな授業やったら、やっぱり申しわけないですね。(笑)

日吉 「流れ」ということもだいぶでたみたいですよ。「流れ」自体に独自性をもたすというか、そういう個性的な授業を教生期間中にやるというのは、やっぱり無理ですか。

堀内 私、やってみたわ。国語の授業だったんだけど。教科書どうりにやってたら、こんなじゃだめだと先生に言われ、全然違う流れで組み立てようということになって、自分でいろいろ捜して、やっていたのだけど、でも、先生の思うことが、私たちに通じなくて困った。指導書を読めば、それなりにいくわけで、私たち自分なりに理解できる。反対に、教生同志で議論したものを、1人1人、1時間ごとに分担して、授業を順ぐり順ぐりやっていくとなると、どこかでチグハグになる。多勢の教生が、その科目を受けもって、やっていこうと思ったら、あんまり独自性の強いものはやれないかもしれません。出口がなくなるというのか、しまらなくなる。

日吉 教生には、教科書だけあれば授業ができるかといえば、無理ですね。おそらく、私らには教科書に準ずる指導書がどうしても必要になってくると思う。

山崎 指導書にも、ちゃんと指導案がついているわけですから、それを利用するのも、一つの方法でしょう。

柏野 一つ思い出したけど。指導書には、ここからここまで1時間、そこからここまで1時間、と区切っているわけですね。教生は長いサイクルを、かけもちでやっていくわけで、自分のあたるところをパッと見た場合、「あれっ、こんなものに1時間もかかるか。」と思ったのです。そして、本当に時間が余ってしまった。時間のもたし方とか、そんなことで苦労しましたよ。どうやれば授業は終るのかと。ベルの鳴るまで

の長かったこと。(笑)

村上 ああ、そうね。附小の生徒なんて、すぐ答言うしね。(笑)

指導案作成の困難点

山崎 みなさんからの失敗談なんかもおもしろいですね。私の場合、よくあった失敗は、指導案を作るとき、「あんなこともやりたい」「こんなこともやりたい」と思って書き、ボリュームが多くなることでした。指導案を書いて、その半分もやればいいところですね。

日吉 指導案を書いて、指導案どおりになかないかな。

村上 指導案なんて、まず目標にピッタリという入口があったら、すぐ書ける。子供の実際を考えなければ、思いつき半分でサラサラと書けるという面があるんですね。書き方のパターンとか、言葉づかいは、二、三枚書くと、すぐにわかってくる。だから、いくらでも書けるんだけど、それが実際の役に立たないようじゃ、なんの意味もない。やっぱり子供のレベルにあうというか、子供をどれだけ知っているかということが、大事になってくるんじゃないかな。

大野 総合実習の時、先生といっしょに指導案を書いたの。その時は、子供の行動などあらゆる場面を想定して作った。指導案というものは1種類だけじゃなくて、その場面場面を考えて、いくつも立てて見たらいいんじゃないかな。自分たちで作るといっても、自分のやり易いことしか考えない、ということもあるかもしれないね。だんだんと教育実習を経て、子供の実態というものがある程度わかってきたし、だいたい1つだけじゃなくて、あのような場合もあるし、このような場合もあるだろうと、深く考えて、その場面場面におきる対応策を考えたいなあと思ったりした。

山崎 今、村上さんが、「指導案は、簡単にサッサと書ける。」といわれたけど、みなさんの場合はどうですか。

柏野 サッサと書けると思う。

山崎 結局、役に立つ指導案を書くためには、やっぱり子供をよく知らない和无理ですね。そして、目標と入口と出口を自分で決めさえすれば、あとはなんとか書けるというのが、みなさんの実態でしょうか。

間 みんなの思っている指導案と、ぼくの思っている指導案とは違うかもしれないけど、ぼくはそんなに簡単に書けなかった。…実は、ものの30分で書いたけどもね。(笑)

その指導案の中に書いたことは、まずはじめの5分でこのことをやって、あと何分か後にこのことをやって、最終的にこのことをやって、そして出るというのが、はじめのぼくの指導案だったね。ぼくのエデュケーションというの、はじめのうちは、指導案がピッタリいったんです。

ところがそのうち変わってきた。あの先生ならあの先生の方法というのがあるように、ぼくにもぼくの方法があると思うようになった。それを指導案にどう書くかということで悩んだ。

ぼくは6週間とも体育は受持ったわけね。先生が創作ダンスで、「あなたの好きなようにやって下さい。」と言われたから、ぼくは、一番最後に5、6人で作るダンスまでもっていきこうと思って、ずっと計画したわけ。これは、指導案というか、ぼくの略案をみてもわかるように、ほんとうに簡単なものでしかなかった。だから、体育の指導案だと10分でできる。体育というのは、自分の実力でどんな指導もできると思うのね。ところが、理科の場合だと、そういうわけにはいかない。たとえば、子供らに葉っぱが交互についているのを、どういうふうに教えようか。いろんな絵を持っていくのも1つの方法であるし、実物を見せてやるというのも1つの方法であるし、まったく知らない白紙の状態から絵を書かせるというのも1つの方法であると思うね。その中で、1つの方法を選べば、何故、その方法をとったかという根拠も、指導案に書く必要があると思えるんです。

村上 理科でも、略案の形を採用して、そんなに詳しく書かずに、ねらいというか、授業の

観点ということだけを書けばどうですか。

間 指導案の中で、その骨になることをふまえて書くと、よりよくわかるんじゃないですか。

特に思ったのは、ぼくは低学年だったから、時間の配分ということが大変むづかしかったですね。ぼくの総合実習でやった国語の1時間というのは、本を読むだけなんです。45分かけて本を読むんです。どうしたらいいかと思ってね(笑)。入口から出口まで本を読む。それしかないから、テープレコーダーに自分の音読をあらかじめ吹き込んで、次にどんな展開になっているかを子供に予想させた。でも、その指導案に何故こうしたのかを説明するのは、大変むづかしかった。指導案というのは、そこまで書く必要があると思うよ。だから、指導案というのは、ものの30分で書いたけれども、本当の意味ではむづかしかったですよ。

再び「指導案は必要か」について

柏野 附属学校の場合、1時間1時間が、普通の学校の研究授業みたいな形を想定してやっているから、はじめから終りまで本を読んで終わるような、そんな授業にまで指導案はいらないと思います。さらに1時間でたくさんやる事があれば、細かく書くとか、そういうふうなのがいいんじゃないかと思います。

日吉 指導書をもとにすると、指導案は立てやすかったということを目撃されていますが、それは指導書には指導書なりのその単元の流れというか、ひとつの大きな物差しみたいなものがあるからですね。私たちは大きい目標とかは、指導書のまま引用して立てていくので、小さい流れを立てる場合にもかなり立てやすくなるんじゃないでしょうか。要するに、単元構成がはっきり決まっていれば、細案というか本時レベルの案を立てるのは、すごく簡単だったんです。次に「指導案を立てるといってどういう事が必要だったのか」と「どういうところでつまつたんだろうか」と、そこらあたりを思い出しながらか話してもらえませんか。

大野 教生の時、石けん水という単元があったんです。4時間ぐらいだった。私は、全時間やったんですけど、他のクラスの人たちはブツ切りでやったらしいのね。私の場合、最初やってみて、ああなんとなくうまくいったという感じで、ズルズルと次はこう、最後の時間はこうしよう、ということで、進行にまかせていった。本当は指導案の中で、ああしよう、こうしようと考えていたけど、かなり違った授業になった。今だったら、かなり実際に近い指導案も書けるし、授業も自分なりにうまくいくのではないかと思う。ともかく、1つの単元を1人が受持つというのは、やっぱりすごく勉強になることじゃないかなあ。

柏野 ぼくもそう思う。1時間ごとのブツ切れでやると、自分なんかその時間だけやればいいと安易になってしまう。教生というのは、自分が1時間終ると、明日の授業のことを一生懸命考えなければいけないよね。そうすると、1つの単元をみんなでもつときは、やっぱり指導書にそってやらなきゃいけない、ということが出てくると思う。独創的なことをやってもいいんだけど、それは何人かで話しあってやらないといけないよね。自分だけ走って、あとの人がバトンを受けられず、そうなる全然つながりのない授業になってしまう。だから、そういう独創的なことを、グループでやろうとするためには時間が必要だね。でも、教生期間中にそんな時間は、とてもじゃないが、とれないような気がするんですけど、みなさんどうでしょうか。まあ、それは担当の先生によっても違うけれどもね。

村上 全体としてそれだけの時間はとれないと思うね。もし現場に出て、自分で1つのクラスを持つようになったら、1つの単元を全部こなすわけですね。そんなとき、自分なりにでも、単元構成をやっぱりしっかりしなくちゃいけないと思うんです。そしたら、最低限、大学では、ある程度の単元構成をする技術というか、そういうものを教えてもらえるといいんじゃないで

すか。その技術をつけてから、教生をした方がやりやすいんじゃないかと思います。それにはまず、子供のレベルにあっていう指導案を立てないと、役に立たないわけですね。私らは、授業研究をやったときに、子供の実際を知らなければならぬというんで、レディネステストをしたんです。そして、そのデータを自分流に読みとって、指導案を作って授業をしたんですけど、結果は「なんと読みとりが不十分であったか」を痛感したものでした。つまり、レディネスを読みとる力量がなかったわけですね。このデータはこうだろう、なんて思いながら指導案を作って授業したら、実際は想定とかなり違っていたわけです。

間 全然話が違うけど、有用な指導案を作るためには、子供のしかり方とか、ほめ方とかも書く必要がないかなあ。

村上 こういう時にしかるとか、そんなことを書いた人はいるかしら。

間 ここがポイントという箇所があるね。そこへ持っていくためには、どうしても子供らを引きつけなきゃいかんという段階が、毎時1回はあるんじゃないかな。そして、このポイントへともっていく、子供のひきつけ方というのが、魚をつるとき、鯛をつるならこういうエサでいいとか、そういう定石があると思うんだけど、どうでしょうか。また、その人、その人によって、いろんな方法があるんじゃないかなあ。だから、ばくなら、ばくなりの方、指導案、というものが書けるようになればいいと思う。

村上 そうですね。

山岸 使いものになるとか、使いものにならないということに疑問があるんです。まあ、ともかく誰かが指導案を立てるね。それが使いものになるという場合は、それを見れば誰でも授業ができるという意味が含まれているんですか。

日吉 いくらかは、含まれていると思います。教生であるということだけで、簡単に次の日の指導案をたてるということになれば、当然、平

坦なもので終わってしまうような傾向があるので、指導案は教材解釈の一端でしかないような気がします。しかし、教材について、私たちでも徹底的に解釈していこうとするならば、それは1つの体系化された計画になってくるんですね。そう、時間をかけて、綿密に教材を理解し深めていくと、授業をする上で、内容面でも方法面でも生きてくると思うんです。

指導案作成の手順

山崎 「どのようにしたら」ということに関して、つまり、みなさんが指導案を立てる手順ですね。それを聞きたいですね。有用性についていろいろ論議してきたが、その有用なものを、どのようにすれば立てられるか。その方法を話していただければどうですかね。教生の時に、みなさんがどんな手順で案を立てたかということで、教生の最初のころと、終りのころを振り返ってみてはどうですか。みなさん。

間 はじめの頃というのは、指導案というのは1種のお守りですね。持っていると安心して授業をやる。だから、担当の先生に「こういう形式で書きなさい。」と言われて書いて、ただそれに時間をきぎんでおけばよかった。生れてはじめて、あんな小さい子らの前に立ってやるんだから、それでも充分有用な効果をもっているんじゃないですか。ところが、だんだん慣れてくると、やっぱり欲がでてきて、自分にあう授業とか、教え方とかを考えだすから、有用な意味を指導案に持たせたくなり、そして教材研究がより深まるんじゃないかなあ。だから、はじめのころは、持っているだけで心強いと思うなあ。たとえば、こんな場面もあったね。ある教生が、黒板の前に立って、パッとあわてて自分の席にいて、指導案をとってきて授業をはじめのね(笑)。

村上 私は、指導案を立てることで、明日の授業の予行練習をした感じがしたわ。教材研究をしてわかったつもりになり、指導案を書いて、明日はこのとおりにすればいいんだと、安心す

る。翌日、それをヒラヒラもって行って机上に置いて、昨日やったとおりに思い出してやればいいからと、子供を見る。そういう意味で、予行練習的というか、そういう感じで役に立った気がした。みんな同じじゃないですか。指導書についても、同じ意味があると思う。でも指導書は教室へは持っていけないでしょ。

中谷 指導書は教科書の見本も付記してあるから、教科書よりも大きいからね。でも教科書の他に問題も印刷してあって、そこに赤線とか横に解説があって、とてもわかりやすいね。

日吉 指導書は見ないで、教科書だけを見て計画をした人はいますか。いないでしょうね。うん。

間 いや、体育なんかは、そうでもなかったですよ。体育はね、指導案は書かないもの。けども、国語、社会、理科とか、そういう科目においては、教科書だけで計画を立てていった人は、おそらく、いないと思う。だって、1年生の教科書には、絵しか書いてないもの(笑)。

日吉 指導書には、絵の横にちゃんと、その絵から、何を読みとらせばいいのか、ということを書いてあったんですね。とくに、理科になると、実験の絵だけしか書いてないわけで、この実験は何のためにあるのか、どういうことをこの実験から教えていくべきなのか、ということはある文章に全然あらわれてないんですね。だからそれを知るために、指導書を見ていたんじゃないかな。

間 誰しも、教科書を見るより先に、すぐ手にしたのが指導書じゃないだろうか。特に、教え方といっても、算数で $2+3$ が5というのを教えるのでも、1時間かけて教えるでしょう。ぼくらは、 $2+3=5$ としか覚えていないものね。ところが、指導書を見ると、こうやって考えるとか、書いてある。それで、とても助かるね。言われりやもつともだ、ということでも、思いつかないものね。

日吉 どうしても、指導書がさん然と輝いているというか(笑)、やっぱり教生とか、未熟な

者の味方として、どうしてもつきまとうんじゃないでしょうか。

村上 でも、指導書には、「こうしろ」「ああしろ」って書いてないから、教科書を読んで、指導書も端から端まで一生懸命読んで、自分のあたっているところを、どうしようかって、考えるわけですよ。そんなときに、指導書を見ると、目標なんかこう「ポン、ポン、ポン」と書いてあるだけで、つなががわからない。そこで悩んで、結局この指導書はよくないという結論がでたりする(笑)。頼りにならないといっても、現実にはしっかりと頼っているくせに…。もう少し丁寧に「ここの移りはこうしなさい」と書いてあればうれしいのだけど、それが無いから、理科の時など宮下先生のところへ「先生、どうしよう」って相談にいった、そこで神様の先生がでてくる。なんかそんな感じだった。

日吉 だから立案の手順は、おそらく指導書を見ることが手はじめになるのかな。

五十川 それは、小学校の場合を言ってるのだと思う。中学校の場合だと、内容がやっぱり高度になってくる。そうすると、ぼくらの知らないことがいっぱいあるし、教材研究が重要になってくる。最初、ぼくらがやったのは、参考書だね。理科にはかなり厚いものがあるね。あれを、最初、読みあさって、いくらか知識をつめこんでいった、次にその中で中学2年生なら何をするかを調べた。それから教科書で見るわけ。何について書いてあるかなあって。そして、最後に、授業はどうするのかって指導書にはいった。つまり、順番としては、ぼくの場合参考書、教科書、指導書、そして計画の順かなあ。

日吉 やはり、学年が上になればなるほどそれは言えるのかな。

間 指導書を見れば一応安心しますね。わからない点は、先生に聞きに行きますが…。

日吉 指導案を書く場合には、おそらくねらいを先に書くよね。指導書には、ちゃんとねらいというのが赤字で書いてあるので、それをまです上に書くんですね。そのあとで、ゴールとス

タート。ゴールもわりと書いてあるので、それらを設定して、次にその中間を書き始めるというパターンだったんじゃないでしょうか。

間 もう少し苦しまないかなあ。はじめは、そのとおりだった。でも、どうしても、ネライとやっていることがアヤフヤになってきて、めんどくさくなった。指導案用紙の下にも書く欄があるんでね。まず準備を書いて、「ああ、これなら、こういうねらいをつけとけばいいだろう」ってことになった。

村上 出口になる部分が、到達目標と違っていても気にしない。

日吉 やっぱり、そこらあたりに順不同というか、それでいいのだろうか、という感じがします。私らのたてまえとしては、授業の目標が先にきて、それにいかに合致させる授業をするか、というのが態度として重要になっていましたよね。

間 だけれども、実際にどういうふうにやっていたかという、わりに今言ったようなラフな傾向があった。それに計画に書いたことだけが大切なじゃなくて、こんなふうに子供らをあしらうというか、うまく授業をもっていくコツも大切ですね。たとえば、このクラスだったら、まずこの子を最初にしかれば静かになるとか、そういうコツをつかむことも、計画として大切だと思います。

村上 これは、指導案を作ることとは違うと思うけれど、子供を見ているというか、そんなことも大事だね。

日吉 今、間さんが言われたことも大切だし、半面の真理だろうとは思いますが、なぜかそれだけでは困る。小学校には小学校なりで、教えなければならぬ知識や、技能とかそういうことも多々あるのだから、間さんの言われたことも含めて、やはりスムーズに授業を展開するためには、指導案というものがかなり重要になってくると思います。

間 しかし、教生6週間で、そこまで高まる有用な指導案を書けるとしたら、すごく立派だ

ね。実際は、無理と思うよ。

日吉 そういう指導案は立てられない、あるいは、経験がものをいうのだ、という風潮が強いのだと思う。けれども、昔から教師はいるのに、なぜ誰もが最初は新米として、スタートラインにならび、そこからある程度の年を経ないと、「一人前の指導ができない」「指導案が書けない」ということになるのでしょうか。ここに私は疑問を感じるわけです。だから、指導案のベースさえはつきりすれば、たとえば私らみたいな素人でもそこからスタートできるし、次の年の人は、次のスタートラインから出発できるということもあっていいと思うんです。まあ、希望ですが……。

山崎 お2人にうまくまとめていただき、ありがたく思います。まず、指導案の有用性について意見がいろいろ出ました。また、役に立つとしたら、どういうふうな内容のものがいちばん役に立つのだろうか。さらに、どういう手順でやったらいいだろうかともっていかれたと思います。このようなことについては、これまで具体的につっこんで話したことがないだけに有益でした。これで今日の話し合いは終りにしたいと思います。みなさんありがとうございました。

(文責 木戸実)

座談会を聞いて

教育工学センター 木戸 実

1

この座談会は、教育実習を経た学生諸君によって、話し合われたものである。その主なテーマは、①指導案とはどういう意義のものか、②どういう書き方で作成すればよいか、と言うことだったと思う。

①の指導案作成の意義は、主に教材研究を深めるためのものであり、授業の机上予行演習をすることにある、と話し合われた。②の書き方については、指導案の形式として具体的なもの

は提出されなかった。しかし、作成方法については、教科書用指導書を参考とし、ともかく授業のスタートとゴールを決めて、学習展開のコースを設定すると、提案された。

2

ここで、私が気になったのは、指導案の位置づけについてである(日吉さん発言)。教生の書く指導案には、付属校教官その他参観者に見せるためと、いまひとつ、自分の授業に役立てる、との二様の目的がある。つまり、見せる指導案と見せる必要のない指導案がある、というのである。

後者は、実践に役立ちさえすればよいので、形式は自由でよい。たとえば、レポート用紙等に自由記述してもよいし、私の場合は、B6版の用紙を綴じて見開きとし、左側に配時と学習展開の概略、右側に学習事項と主要発問を記し、別記の板書内容と伴に授業に利用した。

前者の意味の指導案では、授業者毎に形式がマチマチであっては、困るのではなからうか。少なくとも、一つの学校内では、ある程度、規格化された指導案形式が必要である。勿論、その形式に関しては、その学校独自のものが生れてよいと思う。

3

授業と指導案の関係について、「立派な指導案が書いても、授業がダメなら、何にもならない(大野さん発言)」という意見があった。私も、全く同感である。いくら体裁がよくても、使えなければ困る。教科書用指導書のマル写しのようなものは、授業にどれだけの効果を与えるか疑問である。むしろ、欠点があっても、授業者が自分の頭で考えたものの方が、生きた指導案たり得ると思う。

その意味で、指導案は、「本人が学校を休んだ時でも、代りの教師がそれを見て授業ができるようなものが望ましい(五十川君発言)」との意見に対し、全面的には、賛成しかねる。指導案に表わされ得る授業のイメージには、やはり限界があり、いかにベテラン教師であっても、他

人の指導案を見ただけで、書いた本人の意図を察知することは困難であろう。(勿論、参考にはなるであろうが)

4

次に、指導案の意義について、私は、授業研究資料としての面のあることを付言したい。

指導案を書く効用には、①教材研究を深める、②授業の机上予行演習をする、③自分の授業を他の教師に紹介する、のほかに、④自分の授業の改善に役立てる、ということがある。

私は、指導案を授業記録の最初の部分としてとらえている。そして、授業評価からの反省の一番の対象になり得るものだと考えている。

授業という一連のシステムの中で、準備・計画段階に相当する指導案作成は、一番時間がかかるもので、かつ重要なものである。現場の教師は、多忙であって、じっくり教材研究をする時間も心のゆとりも、なかなか生み出せない現状ではあるまいか。そこで、指導案の形式が規格化されており、前年のものが保存されてあれば、貴重な資料ともなり、また授業の積み上げも可能となるように思われる。

5

最後に、教生の指導案作成についての希望を述べたい。教生は、指導案の記述形式がわかれば、何とか書き上げることはできよう。しかし、児童生徒の実態を知らないの、指導案は実践の場から遊離したものになり勝ちである。そのため、大学の教科教育等の講義の中とか、その他適当な場合において、教育実習の事前指導の一環として、数回の授業参観、もしくはビデオ・映画の視聴を行ない、できるだけ現場の子供を知る機会を与えてほしい。このことによって、実践に役立つ指導案が書け、よりよい授業をする助けとなり得ると思う。

(付記)

この座談会の録音テープから、素稿を作成する際、教育工学センター 奥野恵子嬢に多大のご援助を頂いた。ここに厚くお礼申し上げる。

(山崎 豊)